

深江にあった戦争 3

深江塾

川西航空機甲南工場

北青木一丁目に神戸市営住宅が建ち並んでいる一角がある。阪神電車深江駅と青木駅間の北側、本庄共同墓地の西隣りである。この場所は昭和二十年（一九四五）、幾度かの空襲によって損壊、消失するまでは川西航空機甲南工場の労働者のための寮があった。十数棟からなる木造の建物群からなり、敷地内には独立した調理室、食堂もあった。

川西航空甲南工場は、寮から阪神電車の踏切を渡ると徒歩で五分ばかりで工場の門に着く。本庄村のほぼ中央の海岸に昭和十七年に海軍の航空機製造を目的とした工場ができた。海岸の砂浜を含めると一辺が三〇〇メートル近い四角形の広い埋立地に立地する工場である。敷地は北側に旧国道（現在の国道四三号線・旧国道は新道ともいわれた）に面しており、道路に面して五つの門が東西に並んでいた。工場敷地内には北から順に「翼組立工場」「機体組立工場」「総組立工場」と三つの工場が配置されていた。（図1）。

これら工場があった敷地は、社名が「新明和工業」となった今も本庄の海岸に突き出している。深江の海岸に出て西を見れば、岸から海に突き出した工場が見える。

昭和二十年五月、中山正男は一八歳になっていた。戦時徴用工として昭和二十年の初めから甲南工場で働いていた。一五歳で本庄高等小学校を出てから、父の漁船に乗り組んでほぼ丸三年がたっていた。漸く漁師としてのイロハが身につけられたかと、自分では思える時期に来ていた。戦局が厳しくなる中、正男もお国のためにと漁船から降りて工場で働くことになったのである。

この頃には、男子中学生（旧制）はもとより女子生徒も軍需工場で働くようになっていた。甲南工場には近隣の学校のみならず四国方面の学校からも徴用工として働きに来ていた。

五月十一日の朝、いつものように粗末な朝食を食堂で済ますと、仲間たちと共に浜の工場に向った。門番小屋で入場検査を受けて、自分の持ち場がある建物に向った。工場敷地の南端にある最も大きな建物で「総組立工場」である。工場内は流れ作業で検査や組み立てが行われていた。正男は航空機の翼についている速度調整機弁の検査部門で作業をしていた。

空襲からの避難

午前の作業が軌道に乗り出した頃、空襲警報が鳴った。その日まで、警戒警報は何度か鳴ることはあった。警戒警報では避難命令は出ることはなかった。その日は警戒警報が鳴ったけれど、正男には避難命令

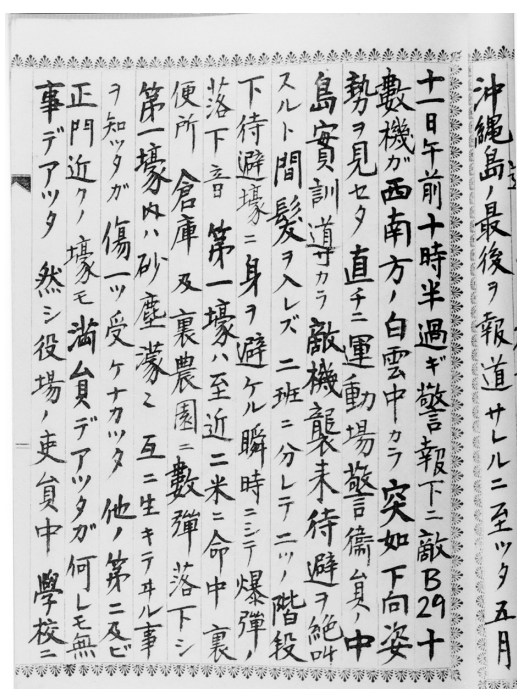


写真1 『本庄小国民学校沿革史』に記載された5月11日の空襲（『本庄村史』より）

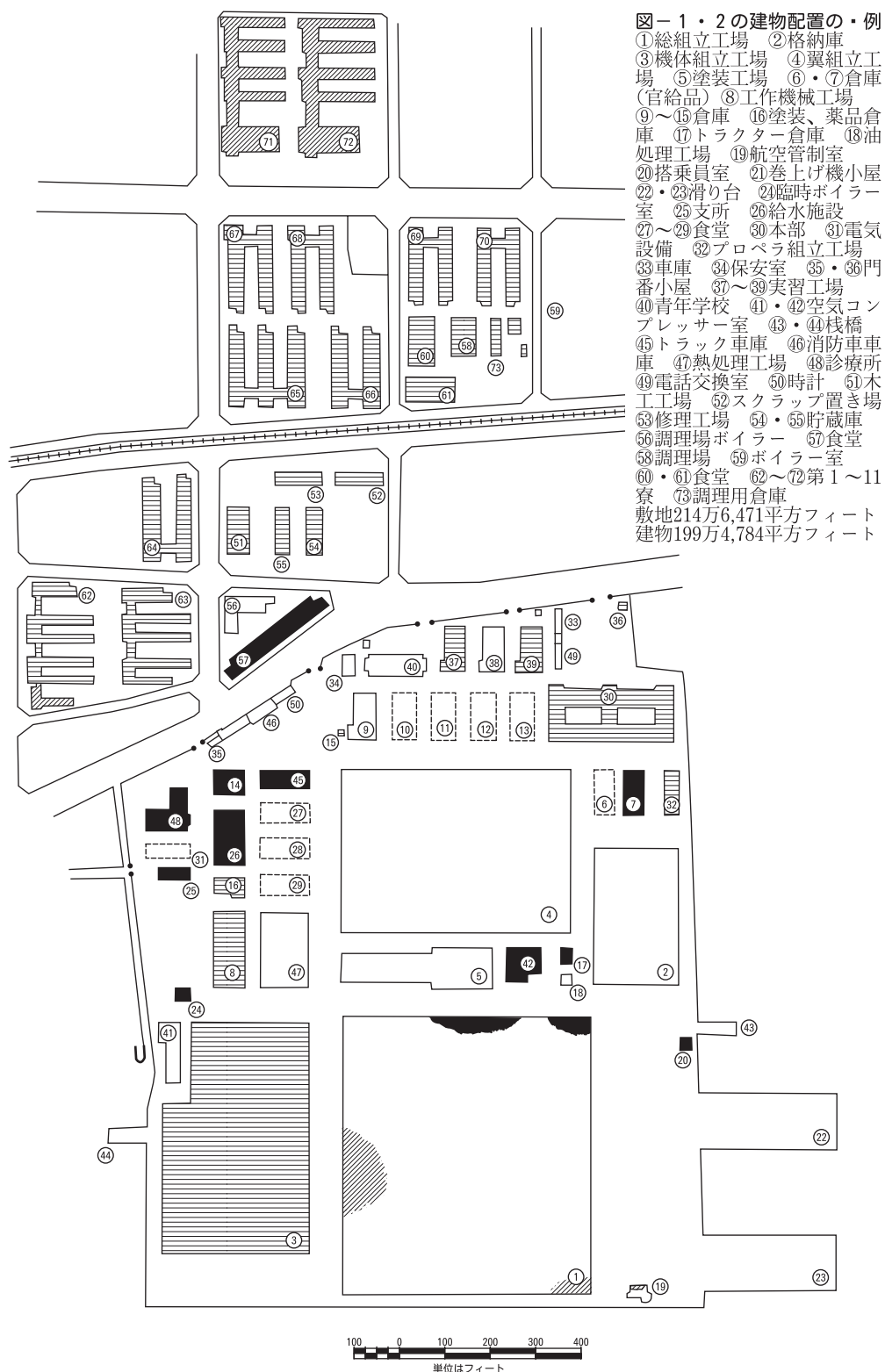


図 昭和20年5月11日の爆撃による被害(『本庄村史 歴史編』より)

が出されたという記憶はない。
警報が鳴って数分もたたないうちに爆音が聞こえてきた。だんだんその音は大きくなる。三月には神戸の西のほうが大空襲にあったという事は正男たちも聞いていた。

「川崎や三菱の軍需工場があったからやられた」「今度は深江の、川西航空もやられるかもしれない」と仲間のうちでは話していた。作業員たちは工場の外に飛び出した。今までは、警戒警報があっても爆音は、るか上空や遠くの空から聞こえてくるだけであった。

工場の外に出て南の空を見ると、点々と浮かぶ雲の間から四つのエンジンをつけた大きな飛行機が次々と姿を現してくる。工場のほうに向かってやってくる。避難命令が出たかどうかはどうでもよかった。

正男たち作業員たちはいっせいに走り出した。あるものは再び工場

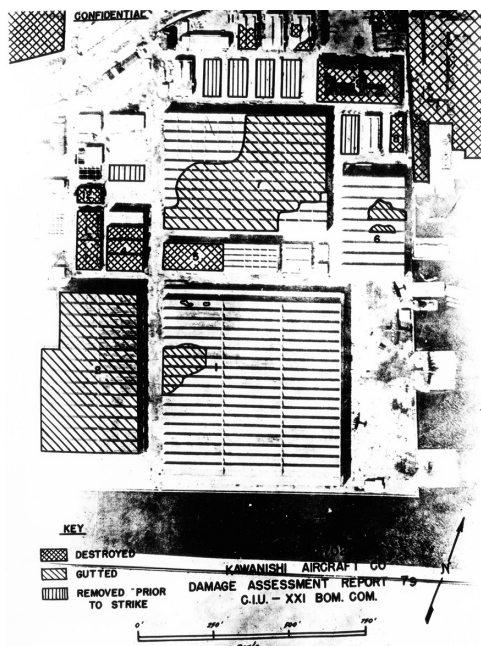


写真2 米軍第21爆撃機軍団『作戦任務報告書』『損害評価報告』に添付された写真（昭和20年5月24日撮影、大阪国際平和センター蔵、『本庄村史』より）

の中に入ってしまった。建物が身を守ってくれると思ったのであろう。正男は総組み立て工場から工場敷地の東寄りを東門に向かって走った。南からやってくる敵機から少しでも遠くに行きたいとひたすら走っていた。工場の門の近くに来たときには、先頭の敵機はすでに上空に来ていた。後のほうでは連続して爆発音が聞こえる。時折全体を上からや横から押し付けるような風を感じた。「爆風」というものを彼は始めて身をもって知った。工場の南の海や工場の敷地の南端のほうに爆弾が落ちていくようであった。身を低くしながら走った。走りながら正夫は何度か振り仰いだ。噂には聞いていたが、聞きしに勝る巨大な飛行機である。長い翼にそれぞれ二発、計四発のエンジンをつけ、銀色に光る爆撃機B 29である。それまで見たこともないほどの低い空を飛

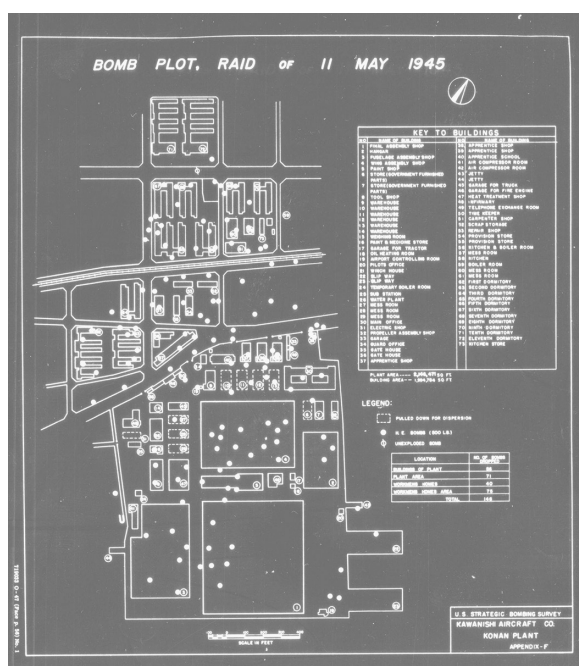


写真3 川西航空機甲南製作所に投下された500ポンド爆弾の着弾点（『戦略爆撃調査団報告』関西大学蔵、『本庄村史』より）

んでくる。次々と数機ずつ編隊を組んで南西の空から六甲の山並みの東のほうへ向かって飛んでゆく。爆撃機の胴体の中央部の下にある爆弾倉の扉が開いているのまで見える。編隊は本庄の、深江の空一面を覆うように通り過ぎてゆく。巨大な渡り鳥の集団が通り過ぎて行くようだ。

正夫は神戸高等商船学校の正門から森村のほうに伸びる道を走った。東に深江の駅をみて阪神電車の踏切を越えた道の西側に防空壕があった。川西航空機と共に深江にあった軍需工場である。入れてもらおうと壕をのぞいた。壕の入り口まで人が入っていた。

彼は、壕に入れてもらうことはあきらめて再び北に向かって走り出した。上空を爆撃機が次々と頭の上を北東に向かって飛んでゆく。集落全体を包み込むような頭上からの爆音と、背後から聞こえてくる爆発音と爆風を感じながらひたすら山手、神戸薬科専門学校の方面に向かって走った。新道（現在の国道二号線）に出るまでの、自分が今逃げていくその道には幾本もの電柱が倒れている。道中に電線がのたうっている。それらをよけながらまた北に向かって走る。

道の端に倒れている人が見えた。けがをしているのか、死んでいるのかわからない。どこかで被害にあってここまで逃げてきて力尽きたのか。正男は倒れている人を横目で見ながら、また北に向かった。

彼が阪急電車の高架をくぐろうとしたとき、B 29の編隊の第二の集団がやってきた。爆音が遠雷のように響いてくる。倒れた人を見捨てて逃げてきた事は辛い気持ちもあったけれど、「自分も今度はおの姿になるかもしれない」と自分に言い聞かせた。「ともかく山へ、薬専（現神戸薬科大）の方へ行こう」と向かった。省線（現JR）を越え、阪急電車の高架下をくぐりぬけて漸く雑草と低木の繁る山の斜面に座り込んだ。空襲警報を聞いて工場から逃げ出してからどれくらいかの時間がたったであろうか。

敵機が去って

正男には時間の感覚がなくなっていた。爆発音はもう聞こえない。B 29の編隊の爆音は東のほうへ遠ざかって行った。深江の駅から南西の方向、川西航空機の工場、神戸高等商船学校（現神戸大学海事科学部）、あるいは本庄国民学校のあたりから黒い煙が上がっている。阪神電車の北側に並んでいた会社の寮付近からも火災と黒煙が混じって上がっている。それらは正夫の目には深江の集落全体が燃えているように見えた。

朝から空を覆っていた雲と空襲による火災の煙とが入り混じった空から雨が降り降り出した。黒い雨であった。

日暮れが迫ると共に空を覆っていた黒煙も消えてきた。彼は工場ではなく自宅にむかった。自宅は工場から東へおよそ一キロほど離れた場所にあった。今の深江南町二丁目の海岸近くである。自宅は無事であった。家に入ると正男の姿を見るなり父は「お前はやられたとあきらめていた」と驚きながらいった。

父は前夜（五月十日）に「夜うたせ漁（打瀬網による夜の漁）」に出ている、五月十一日の空襲の朝は漁から帰って自宅にいたのであった。朝がた漁から帰って自宅で寝付いたところ空襲警報が鳴ったのである。爆音は南、西のほうに聞こえた。その方向を見ると南のほうの雲間を通して、今まで見たこともないほどの飛行機が編隊を組んでこちらの方へやってくる。バラバラと爆弾を落としながら川西航空の工場あたりの上空にやってくる。工場あたりからは雷が連続して落ちるような爆発音が聞こえる。黒煙が上がる。工場あたりは爆発音と黒煙に包まれている。父は「正夫はあの工場にいる。やられているだろう」。爆死がどんなものか、どのような様子なのかは父も見ることがなかったけれど、大怪我をして倒れている息子の姿を想像した。

父が息子の「死んだ」姿を想像している頃、正男はいち早く工場か

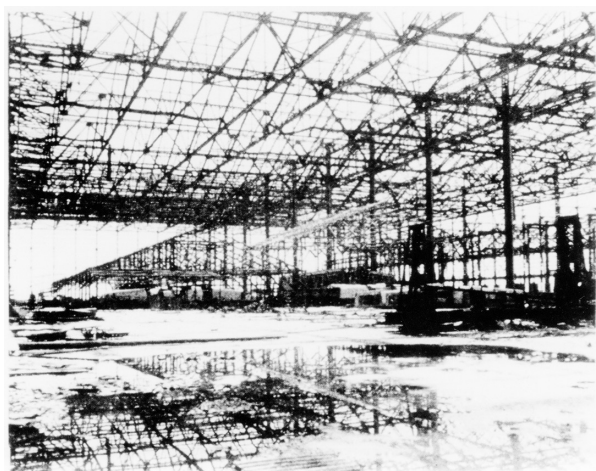
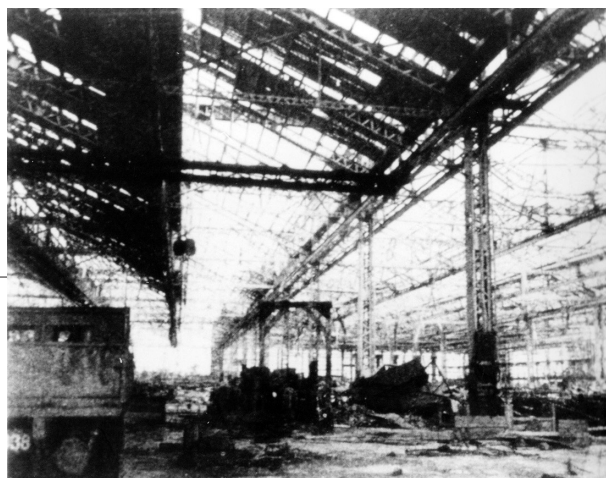


写真4 川西航空機の機体翼組立工場の南東

写真5 同工場の翼組立工場内部（いずれも『戦略爆撃調査団報告』
関西大学蔵、『本庄村史』より）

ら離れ山のほうへ避難していたのである。

翌朝、正男は高橋川の河口に留めてある父の船を見に行った。高橋川の西の岸と神戸高等商船学校の敷地の塀の間に爆弾が落ちた跡があった。中山の漁船は八尋船という三本柱の比較的大きな打瀬船であった。新造して三年、三本柱の真新しい船である。爆風のため船腹がゆるんで少し隙間ができていた。三本の帆柱のうちの「とも柱（後の柱）」は、直径が一〇呎、長さ五呎ほどのいわば丸太である。その柱が、爆風のためか、破片のためかはわからなかったが、縦にまっ二つに裂けていた。正夫は「とも柱はやりなしだが、船はもちそうだ」とほっとした気分になった。

中山の船の反対側に係留していた二艘の船は船腹が割れてしまっていた。そのうちの一艘は深江の漁師の寺田政雄さんの船であった。寺田さんの漁船にまつわるものには後日談がある。寺田さんは戦後まもなくこの船を廃船にして新しい船を購入して漁業を続けた。その漁船には寺田さんの一九歳になる息子と一七歳のもう一人の深江の若者が乗り組んで漁業を続けた。昭和二十八年十一月二十八日、突然の嵐のためその船は沈没し二人の若者が亡くなった。沖に漂う船だけが仲間の漁師たちによって高橋の港の岸壁に引き上げられた。若者二人はついに行方不明のままである。長い間、誰もその船でもう漁に出ることはなかった。船主にとっては自分の船の二代続いての災難であった。

空襲の後で船を高橋川で確認した後、正男は工場にむかった。工場からは「被害の軽い、稼動できる機械で直ちに作業を開始する」と告げられた。それからおよそ一カ月間ばかり、彼は再び工場で働いた。

毎日、工場に行く道すがら工場の東に隣接する神戸高等商船学校はコンクリートの建物以外は皆無残に真っ黒に潰れたり焼けたりした現場を見ることになった。正男は、空襲の幾日かあと、神戸商船学校の学生二名を高橋川の河口の浜で茶毘に付される様子を見た。この学生たちは当日「御真影」警護のために配置についていて、至近弾の爆風に二〇呎ばかりも吹き飛ばされて着剣した銃を握り締めたまま亡くなったという。

五月十一日から終戦まで工場で働く中で、この工場を中心にした空襲のおぼろげながら全貌

がわかってきた。その日の空襲は、サイパン島からやってきたB29のおよそ六〇機の集団であること。投下された爆弾は五〇〇ポンド爆弾（二二〇～二五〇ポンド爆弾）であること。工場の敷地内には一〇〇発以上が落ちたこと。工場の関係者に三〇〇人くらいの死傷者がったこと。更に、隣接する学校の岸壁で食料品の荷揚げ作業の関係者が巻き添えで多くの死傷者が出たこと。

これらの多くの死者の取り扱いは非常時のために多くの困難があった。芦屋中学（現・県立芦屋高校）の生徒であった太田恵造氏は、空襲を受けた地域の残骸始末のために動員されていた。空襲の当日から幾日か後、遺体が工場の北側の道端で茶毘に付されているのを見た。身元が確認できないまま茶毘に付しているのであらうか、作業している人々は家族ばかりではないようである。太田氏たち中学の生徒は命じられた作業に取り掛かることもできず、集めた木材で遺体を焼く作業を手伝うことにした。作業をしながら聞くともなしに聞こえるのは自分たちと同じ年代の若い人であるという。自分たちはまだ徴用工ではなく、勤労奉仕でその作業は空襲の後の残骸処理（壊れた建物などの金属類を回収する作業）である。そのために、このような危険な目にあわなかった。あまり年齢の変わらない若者が戦禍に倒れ、国のために殉じたのだ。太田氏は茶毘の作業の手伝いをしながら自分が果たして本当に幸運なのか、なんとなく申し訳ない気持ちになった。そう思うと涙があふれて止まらなくなった。

戦争は終わったけれど

六月の半ば、あの空襲の日からひと月が過ぎた。父が「正男、日生へ帰ろう」といった。岡山の日生は父の生まれ故郷である。船で岡山に行くという。中山の家族は、正夫と父が中心となって、すぐに日生に向かって出立できるように準備に掛かった。日常生活に欠かせない身の回り品や貴重品をまとめた。家族みんなで高橋川河口にとめてあ

る船まで運んだ。

まだ明けやらぬくらいうちに深江を出た。川西航空機甲南工場、正夫たちが働いていた組み立て工場は屋根の大部分は吹き飛んでいたが、骨組みだけは原型をとどめている様子が、船からはよくわかった（写真4、5）。甲南工場の南をぐるりと西に廻って、出来るだけ海岸近くを青木、魚崎、御影と進んでいった。

岡山の日生で終戦を知ってから暫くして中山の家族は、再び深江に戻ってきた。中山の家は焼けてなくなっていた。深江の村は、五月十一日の空襲のあと、八月六日の夜に大規模な空襲を受けていた。その空襲は焼夷弾による空襲で村の家々の多くが焼かれた。五月の空襲のあとで、父が「日生へ帰ろう」といったのはよき判断であった。家は焼けたけれど、家族全員が無事であったことは不幸中の幸いであった。

終戦からしばらくして二人の同級生の消息を聞いた。彼らは同じ本庄の学校を卒業し、深江の沖で漁業に携わった仲間でもある。同じ同級生の一人は、海軍に志願した。ウラジオストック方面で沿岸封鎖の作戦に従事していた。その作戦に参加した三隻のうち、二隻が敵にやられて沈んだ。乗り組んでいた艦は幸い被弾することなく無事帰還した。

もう一人の同級生は、志願兵として満一八歳になると同時に陸軍に入隊した。入隊して短い訓練の後、輸送船で南方方面に出陣した。初陣である。戦地に着く前に、輸送船は沈められ、戦死した。二人の墓は、本庄墓地にある。

本文は、中山正男氏（昭和二年生）からの聞き取りをもとに『神戸商船大学七十五年誌』、『神戸薬科大学年史』、『本庄村史』並びに県立芦屋高校五期生の卒業五十周年記念誌『芦五会』（二〇〇〇年）を参考にして作成した。